

英雄ここにあり_(下)

柴田錬三郎

講談社版

三国志 英雄ここにあり (下)

© Renzaburō Shibata 1969

560円

昭和44年 1月28日 第1刷発行

昭和48年 5月12日 第4刷発行

著 者 柴 田 鍊 三 郎

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(945)1111(大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 所 豊 国 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 株 式 会 社 国 宝 社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

0093-147535-2253 (1) (文2)

目次

奇蹟の風	狂風と良薬	醉吟無惨	三寸の舌	鳳雛出現	表と裏	一百杖	掌中の計	箭づくり船	怪物戯言	周瑜詐術	擬装船
------	-------	------	------	------	-----	-----	------	-------	------	------	-----

七六	六九	六二	五六	五〇	四五	三九	三三	二六	二〇	一四	七
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

悲運西涼將軍	龐統無礼	名將逝く	女色	宝劍、石を断つ	婚姻策	慈悲矢	經国への道	手負い策	関羽、罪あり	網	赤壁の猛火	関羽無用
--------	------	------	----	---------	-----	-----	-------	------	--------	---	-------	------

一五七	一五一	一四五	一三八	一三二	一二五	一一九	一二二	一〇七	一〇一	九五	八八	八二
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----

戦	成	偉	秋	老	落	中	謀	孤	劍	望	試	策
い		丈	風	将	鳳	計	士	掌				士
は		夫	索	屈		失	服	は				張
な		馬	寞	す	坡	敗	毒	鳴	舞	蜀	す	松
お	都	超						ら				
								ず				

二 三 七	二 三 一	二 二 五	二 二 九	二 二 三	二 〇 七	二 〇 〇	一 九 四	一 八 八	一 八 一	一 七 五	一 七 〇	一 六 三
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

骨と碁

二四三

秋風起って白雲飛ぶ

二四九

嗚呼寿亭侯！

二五五

曹操逝く

二六二

七歩の詩

二六九

張飛もまた

二七五

復讐軍

二八二

遺詔

二八七

出師の表

二九三

余章補筆

三〇〇

三国志

英雄ここにあり
(下)

装幀・さしえ
山崎百々雄

擬 装 船

一

曹操^{うそう}よりの書簡を持った使者が、江岸へ船を寄せて来たのは、劉備^{りゅうへい}玄德をむなく去らせていくばくも経たない頃であった。

使者は、周瑜^{しゅうゆ}に謁見を乞うて、帷幕^{いぼく}に至った。

周瑜は、何気なく、書簡を受けとって、その封皮の上書を一瞥するや、さっと、顔色を一変させた。

『漢大丞相

周都督に付して開拆^{かいさく}す』

そうしたためであったのである。

「なんという無礼！ 許しがたい傲慢！」

周瑜は、書簡を足下へ、たたきつけて、踏みにじった。

そして、左右に、

「そやつを斬れ！」

と、下知した。

魯肅^{ろそく}が、あわてて、書簡をひろいあげて、

「たとえ兩國の間に仇敵の憎しみがみなぎるとも、すすん

で参った使者を、問答に及ばず斬るのは、仁義にそむくこととでござる」

と、諫めた。

「魯子敬の忠告も、いまは無用だ。曹操が我に何を云わんとして居るか、文面に目をさらさずとも、知れて居る。いま、この周瑜が為すべきことは、使者の首を刎ねて、味方の士気を昂揚させる血祭りあるのみ」

周瑜は、容赦なく、使者の生命を奪ってしまった。

魯肅は、曹操の書簡を破棄せずに、あとで、そっと披いてみた。

それは、恫喝^{どうかつ}の一文ではなかった。意外にも、一篇の詩が入っていたのである。

酒に對して當に歌うべし

人生幾何ぞ

譬えば、朝露の如く

去りゆく日々の苦多し

慨して當に慷すべし

憂思忘れ難く

何を以てか憂いを解かん

唯あるのみ杜康

青青たる子が衿

悠悠たる我が心

ひたすらに君が為の故に

沈吟して今に至りぬ

呦呦として鹿は鳴きつつ

野の萍をくらう

我に嘉き賓客あらば

瑟を鼓き笙を吹かん

明らかに明らかなること月の如く

なんの時にか擧うべき

憂い、中より来りて

断絶することあたわず

陌を越え、阡を度りても

枉くまでも用くて存い相らせん

契濶に談讌すべし

心に念ず旧き恩

月明らかにして星は稀なり

烏と鵲は南に飛び

樹を繞り三たび匝るも

何の枝にぞ依るべきや

山は高きを厭わず

水は深きを厭わず

周公は嘔みしものを吐きしかば

天下の人は心を帰せぬ

まさに、見事な詩であつた。

乱世の梟雄たる一面、天才的な文人である曹操の才華が、この詩に借しみなくひらいていた。

江東を臨んで百万の兵を進めて来て、延々数十里の間に布陣し、いままさに、天下分け目の決戦の秋を迎え乍ら、

曹操は、帷幕にあって、人間の匂いのこもる詩を作り、それを、周瑜に贈つて来てみせた。

当然、周瑜もまた、これに応えて、武将のみが知る感慨を、詩にうたつて、贈り返すべきであつたのだ。

——それをなんぞ、一読もせず、に、踏みにじつたばかりか、使者の首を刎ねるとは！

魯肅は、暗然となつた。

二

周瑜は、使者を斬つた上からは、坐して待つよりも、むしろ、こちらから討つて出るにしかず、とほそをかため、



号令を下した。

甘寧を先鋒となし、韓当を左翼、蔣欽を右翼となし、周瑜自ら、総指揮をとって、出動することになった。

これに対して、曹操は、

「風雅を知らぬ江東の駄魚め、釣りあげて、はらわたをつかみ出してくれる」

と、激怒の下知を全軍にひびかせた。

劉表の旧臣たりし水軍都督の蔡瑁、副都督張允が、前衛を申しつけられた。

曹操が、荊州を裏切った蔡瑁、張允を、詭佞の小人と知りつつ、麾下に加えて、頭爵を与え、水軍の都督に任じたのも、呉国との水戦に備えたからであった。

蔡瑁、張允は、水戦に於ける限り、伎倆熟練者だったのである。

数十隻の艨艟・關艦は、船體相衝突で、三江口めざして、南下した。

夜の帳があげられたが、なお、江上は、濃霧に押しつまれて、彼我の戦影が判じがたかった。

やがて――

急速に、霧が散るや、敵も味方も、意外な間近に、その姿を発見して、すわと色めきたった。

「賊軍、いかに！」

呉軍の先頭をきって進む關艦の船先に、悠然と佇立した

大將が、大音をあげた。

「われは、甘寧なり！ おのが勇武を誇る者あらば、船を寄せて、一騎討ちせいっ！」

風に乗って、その声が、曹操勢の船上にひびき渡った。

「小癩っ！」

蔡瑁は、実弟蔡薫を呼んで、關艦を進めて、一気に、あの關艦を分捕ってしまえ、と命じた。

關艦というのは、強靱な生牛皮で外装した快速の単舸であった。

蔡薫は、心得たとばかり、關艦十艘を率いて、甘寧が船先に立つ關艦めがけて、矢の迅さで、突進した。

「来たか、曹賊の家豚いっぴき！」

甘寧は、弩弓に、大箭をつがえると、満を持して、射放った。

「ああっ！」

蔡薫は、咽喉をふかぶかとつらぬかれると、大きく双手を挙げて、水中へ、落下した。

その機をはずさず、

「かかれっ！」

甘寧の号令一下、無数の石弾が、關艦めがけて、雨と降りそそいだ。

指揮の将を討たれて、士気がくじけたところを、どっと撃ちかかられて、關艦十艘の曹兵は、いたずらに、うろた

えた。

その隙をのがさず――。

右から蔣欽、左から韓当が率いる武将の単舸数十艘が、霧の中から、進み出て来た。

折から、江上に、強風が渦を巻き、彼我の船は、木の葉のように躍^{おど}った。

曹兵の大半は、青州・徐州の産で、狂濤上で闘うのは、生れてはじめてであった。

三方から挟撃されるや、為すところもなく、鉄箭と石弾をくらって、つぎつぎに、流れへ落ち、船底へ伏してしまつた。

蔡瑁は、味方の艨艟の危機を視てとるや、百の戦艦へ、一挙に突進せよ、と命を下した。

これを知った呉軍は、退くのも、すばやかた。

甘寧、蔣欽、韓当、いずれも、巧みに、再びたちこめる霧の中へ、かき消すように、船影を没してしまつた。

金鼓一打によって、自由自在に、敏捷無比に、船首をめぐらし、陣形を變転させる見事さは、流石は、周瑜が、鄱陽湖上で必死の訓練をほどこしたたものであつた。

曹操水軍は、その緒戦に於て、八艘の艨艟と五百の兵を喪つた。

この敗報に接した曹操は、不快の念をかくしきれず、蔡瑁・張允を、本營へ呼びつけた。

曹操は、都督たる者を、衆將の面前で、罵倒こそしなかつたが、顔色もなく平伏する二人を、冷然と見下して、「御辺らは、余を納得せしめる申しひらきができぬ時は、自らを裁かねばなるまい」と、云つた。

蔡瑁は、死を覚悟して罷り出ただけあつて、わるびれずに、

「もとより、敗戦の責は、われら兩名が負わねばなりませぬが、いささかの弁明を許されますならば、わが水軍が長旅の故の操練不足に加えて、青州・徐州出身の兵らが大浪のゆれるのに弱く、箭を射かえず余裕を失つたのにひきかえ、敵水軍は、よほど鄱陽湖に於ける調練がゆきとどいて居る模様であります」

「それは、判つて居る」

曹操は、声をあげた。

「さればと申して、わが兵をして、短期日をもって、長江の大浪に馴れさせることは、叶わぬ。……現状に於て、敵を撃破する妙策を樹てるよりほかはなく、それが、兵法と申すもの。都督ならば、当然、敗北の無念の中より、その妙策を生んでいであらう。如何に？」

「おこたえつかまつる。まず、考えられますことは、攻撃の陣備えを止めて、ひとまず守備の態勢をえらぶべきかと存じます。すなわち、數里の間に互^{あひ}つて水寨を立て、青

州・徐州の軍を中に置き、荊州の軍をして外をかためしめて、これより昼夜、猛訓練をほどこしますれば、兵は十日を経ずして、波浪に堪えるように相成りましょう」

「よし、きまった。都督自ら指揮をとって、水寨を築くがよからう」

曹操は、許した。

三

蔡瑁、張允は、必死であった。

もし万が一この決戦に敗れたならば、おのれら兩名の生命はないものと、覚悟していたのである。おのれら兩名は、曹操から、必ずしも信頼されて、都督副都督に任じられたとは考えていなかった。

北岸一帯に、二十四座の水門が構えられ、その寨柵は延延として、十余里に及んだ。

その水寨の外側には、闘艦がならべられ、一大城郭を成した。柵内には、無数の単舳を往来せしめた。

陽が落ちると、その壮観は、一大美景を呈した。

全船隻が燈火を点して、天心水面、ことごとく紅にそまつた。

これにつづく陸地の陣は、三十余里に亘って、煙火が燃えさかかって、あたかも地軸が焼けて星斗を焦がしているように遠望された。

「はてな？」

南岸に築いた望楼上に立っていた周瑜は、はるかな北方の暗夜を彩る真紅の色に、首をかしげた。

魯肅を呼んだ周瑜は、その疑惑を問うた。

「おそらく——」魯肅は、こたえた。「あれは、曹操が蔡瑁、張允をして、水寨を築かしめ、その焚く篝火が、水面を染め、天に映えて居るものとみえ申す」

「敵は、水寨を構えたか」

周瑜は、緒戦に於て大捷を得て、曹操おそるるに足らず、とややあなどり気味になっていたところであった。

にわかに、不安が、胸中に湧いた。

「どのような水寨を構えたか、ひとつ、見とどけるか」

周瑜は、不敵にも、その決意をした。

「ご自身で参られるので——？」

魯肅は、眉宇をひそめた。

「心配は無用。女を売る奴隸船を装うて、往く」

周瑜は、樓船一隻を用意させた。

華やかな幔幕をめぐらして、いかにも、歌舞の娼婦を売りに来た奴隸船とみせかけ、幔幕の陰には、百余の弩弓手を伏せさせておいて、夜陰に乗じて、しずかに、南岸をはなれた。

いざとなれば、五十余挺の艦で、疾風のごとく江上を奔ることが出来る船であった。

夜明けがたに、水寨へ迫るや、周瑜は、わざと、鼓樂を奏せしめて、樓上に、美しく装うた女どもを数人立たせた。そして、ゆっくりと、水寨に沿うて、流れを下りつつ、周瑜は、敵の陣容を、おのが目でたしかめた。

觀察するほどに、周瑜の心中には、恐怖の念が生じた。

「陸地を跳梁することだけしか知らぬ悍馬が、水中へとび込んで来て、どれだけの泳ぎを示せるものぞ、とあなどっていたが、これは、いかぬ！ この整然たる水軍の陣容、態勢は、なみなみならぬ威力をそなえて居る。……曹操のひっさげる戦力の強大、そして、この水上の戦いに対する周到なる準備よりは、なんとも、おそろべきものと云わねばならぬ！」

独語するうちに、周瑜の肌には、粟が生じた。

「敵軍の都督蔡瑁、張允は、たかの知れたる小人輩と、見くびっていたのは、わが錯誤であつた。……よし！ まず、蔡瑁・張允を討ちとてくれる！」

周瑜は、決意した。

恰度、その時、水寨内で、けたたましく金鼓が鳴りひびいて、十数艘の戦船が一斉に動いた。

「いかん！ 発見されたぞ！」

周瑜は、脱走を命じた。

笛が鳴らされるや、一斉に、両舷から、五十余挺の櫓が、突き出された。

「漕げっ！ 全速力！」

擬装船は、飛ぶがごとく、流れをすべった。

「待てっ！」

「やるなっ！」

十数艘の戦船が、獐犬の群のごとく、水寨をとび出して、追跡した。

しかし――。

周瑜の率いる擬装船は、おそろべき船足の迅さを持っていた。

追跡の船群は、みるみるひきはなされて、とうてい、南岸まで追うことは、及びもつかなかった。

「ふむ！ 逃げたか。その擬装船には、おそろく、周瑜が乗り組んで居つたに相違ない。こちらの水寨を、しらべに来たものであらう」

報告をきいた曹操は、そう云ってから、

「昨日は、先陣を破られて鋭気をくじかれたし、今日は、わが陣中を見すかされた。このように、やすやすと、わが弱いところを衝かれるようでは、さがが思いやられる。……諸將、以て如何となすぞ？」

と、鋭い眼光で、ずうっと、見渡した。

すると、打てばひびくように、応えた者があつた。

「丞相――」

すつくと立ったのは、帳下の幕賓の一人、九江の人、蔣

幹、字は子翼という人物であった。

「それがしが、往つて、周瑜を説き、三寸不爛の舌を恃んで、これを、降らしめましょう」

周瑜 詐術

一

曹操帳下の幕賓・蔣幹は、そのむかし、周瑜とは、故郷を近くにして、同じ学塾で机をならべた友であった。

したがって、周瑜に会って説けば、必ず、功を成す、という自信があった。

「呉へおもむくのならば、一艘の軍船を与えよう」

曹操は、云った。

「それには、及びませぬ。扁舟一艘と一童子二僕があれば、足ります」

蔣幹は、こともなげに、云った。

やがて、蔣幹は、剣をすてると、葛巾布袍の学者姿となつて、単舸の人となつた。

舸先に、漢朝の使者を示す錦旗をかざしたために、一矢もあびせられずに、三江口へ到着した。

恰度、その時、周瑜は、本営の帳中であつて、軍議をこらしていたが、蔣幹の来訪が告げられるや、高く笑つた。

「曹操め、わが幼友達を、説得の使者として、遣して来たか。よし、説客をもてなすに、わが方には、致し様がある」

周瑜は、居竝ぶ諸将に向つて、斯様々にせよ、と命じた。

やがて、蔣幹は、青衣の小童ただ一人をつれて、本営へやつて来て、はつと、おどろきの目を瞠つた。

本営前には、花帽をいただき、錦衣をまとつた兵が数百、あたかも、花が咲いたごとく華やかな列をつくつていた。

そして、轅門には、周瑜自身が、七彩の刺繡鮮かな錦衣をまとい、待ち受けていた。

「おう、これは、旧友の到来——別れて二十余年に相成るが、つつがなきや、子翼——」

周瑜は、双手をさしのべた。

蔣幹は、その前に進むと、うやうやしく拝礼し、

「いまは、身分にはるかな上下ができ申し、そのお手握るのは、無礼に存じます」

と、云った。

「左様に、へりくだられては、むかし話もしたい。……尤も、御辺は、旧情をあたために参つたのではなく、曹操